

数学コラム (6)

書字方向

西山豊

「ブーメランはなぜ戻ってくるのか？」を英語に翻訳すると

Why does a boomerang come back?

になるが、アラビア語では

لماذا تعود البومرنغ؟

となる。英語は左から右に書くが、アラビア語は右から左に書く。アラビア語、ヘブライ語、ペルシャ語などイスラム文化圏では文字の書き方が右から左に向かう。それだけでなく、すべての文字が左右反転している。疑問符は「？」でなく「؟」である。

文字を書き進める方向のことを書字(しょじ)方向という。書字方向は大きく分けて横書きと縦書きがある。横書きでも左から右に書く「左横書き」と、右から左に書く「右横書き」がある。さらに、右横書きの場合は文字自体が左右反転しているのが特徴である。フェニキア文字は右横書き専用であったが、ギリシャ文字は右横書きと左横書きを混用し、時には牛耕体といって行の折り返しごとに書字方向が逆になることも行われた。

縦書きは右から左に行が進む「右縦書き」と、左から右に行が進む「左縦書き」がある。日本語は右から左に行が進む右縦書きであるが、文字が反転しない型である。戦前の日本にみられた右横書きはアラビア語と同じかと思われるが、文字が左右反転していない型で、1行1文字の縦書きと見るべきであるとの見解がある。

横書きか縦書きか、左方向か右方向か、文字の左右反転か否かを分類すると

$$2 \times 2 \times 2 = 8 \text{ (通り)}$$

の書字方向が考えられるが、すべてが存在するわけでもない。

モンゴル文字は特殊な書字方向である。まず縦書きである。これは中国の影響を受けている。しかし文字はイスラム文化の影響を受けたウィグル文字である。右横書きのアラビア語が90度だけ左回転(反時計回り)したようなものである。ここにはイスラム文明と中国文明が合流した痕跡がみられる。

文字の歴史は、メソポタミア文明のシュメール文字(紀元前3500年頃)が最古と言われ、粘土板に葦の尖筆を押し当ててくぼみをつけることによる楔形文字で、縦書きと横書きの両方が存在したようである。古代エジプトのヒエログリフ(聖刻文字、紀元前3000年頃)は「左横書き」と「右横書き」、「左縦書き」と「右縦書き」のすべてが存在し、文章の向きは人や動物の鼻の向きで決まっていた。この中でも右から左の右横書きが進化していく。

右横書き優位については次のような仮説がある。石工が左手に鑿(のみ)、右手に鎚(つち)を持って聖刻文字を石盤に刻んだので、前に刻んだ文字が左手に隠れないようにするために右から左の方向へと進んだとするものだ。石工の右利きが理由である。この場合、文字が左右反転している理由もわかる。

日本語や中国語にみられる右縦書きの優位については次の説明がある。古代中国では竹簡または木簡を使い(紀元前1300年頃)、その上に一行分の文字列を書き、上と下で綴じて巻いて保管した。これを読む時は左手で竹簡を持ち、右手で順番に竹の棒を引き出して行った。巻紙に筆で書く場合も、左手に巻紙を持って右手の筆で書き進め、書いた部分は右にたらし墨の乾燥を待つのが自然である。ここでもヒトの右利き優位が鍵になっている。

習字は右縦書きで手が汚れるのではと思うが、筆は立てて持ち、手を紙につけないのが基本らしい。しかし、中東諸国は依然として右から左の右横書きであるのでインクで手が汚れるのではと疑問が残る。

(にしやまゆたか/大阪経済大学)